

生きてはたらく日本語をめざして

—平成 28 年度第 1 回日本語検定委員会特別賞を受賞—

在外教育施設 グアム補習授業校 校長 小住智子先生



この度は「日本語検定委員会特別賞」を拝受し、身に余る光栄に存じます。あらためて、海外における日本国語教育に寄せられる思いを再確認し、気が引き締まる思いがいたします。

在外教育施設グアム補習授業校では、2013年より断続的に教育の実態について調査をしてきました。その内容については、芝野淳一氏によって「在外教育施設における『学力』問題：グアム日本人補習授業校におけるフィールドワークより」（『部落解放』716号、2015年）などの論文で紹介されています。

これらの調査をもとに、児童生徒のニーズに合わせた学習形態を2015年度から構築し、2016年度より「漢字・日本語の習熟度別学習」の導入を行い、多様な授業形態に取り組んでいます。

本校のような在外教育施設の課題は、誤解を恐れず、雑駁に述べれば、以下の3点にあると思います。

- ①児童生徒の日本語能力についての格差。
- ②日本語学習へのニーズの多様性。
- ③現地採用教員の技術や資料と現行の日本国内教員の技術・資料の乖離。

①については、日本語に親しむ生活環境である家庭や学校の学習環境によっても差が生じます。また、週1回の補習授業は、日本国内の国語教科書を読み解く授業が主流となっておりましたが、国語教科書の読解だけでは、②のニーズに応えられません。高校進学に関しても、日本国内を選択する

次ページへ 

者と現地校に進学する者とは分かれ、その先の大学進学や就職となると、日本語を主流に外国語を生かすのか、外国語を主流に日本語を強みに加えるのかなど、その選択肢は個々によって様々です。その生涯にわたっての日本語キャリアスキルについての基礎となるのが本校のような在外教育施設だとすると、③のように現地採用教員にとっては、現地校の状況のみならず、刻々と変化する日本の教育事情についても理解することが求められますが、そのための資料が少ないのが現状です。また、世界の状況を考えるとIB（国際バカロレア）の導入に伴い、バイリンガルからトライリンガル、マルチリンガルと発展していくと考えられます。このような情勢の中、現行の学習方法が、児童生徒の生涯学習を支えるとするなら、その教育技術もまた磨かなくてはなりません。

そのための方策として、本校では、日本語能力の習熟に従い、自己目標を立てて学習する、習熟度別学習を取り入れました。この習熟度別学習では、一斉学習では得られない講師との個別的な学習交流を通して、児童生徒が自己学習の方法を身につけ、目標達成に向けて地道に努力するようになることを目指しています。



日本語検定に挑むことで、こうした学習の成果で、達成感を得て、さらに向上しようとする意欲につながられるのではないかと考えています。なお、日本語検定は信頼度の高い検定であること、教科書に準拠していて学習が想定しやすいこと、多様な国語力が網羅されていることが魅力的だと感じています。日本語検定があったからこそ本校の習熟度学習が実現したと言えます。

まだこの取り組みは緒についたばかりですが、日本語検定委員会の皆様のご協力をいただき、グアム補習授業校の子どもたちが、日本語を通して、自己を磨き、世界に羽ばたく人になることを願って取り組んでいきたいと考えています。このささやかながら果てしない挑戦に、今後ともご理解ご支援を賜りますようお願い申しあげて、お礼といたします。

